
闇夜の月

a-m

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

闇夜の月

【Nコード】

N9035V

【作者名】

a - m

【あらすじ】

ある悲劇がゆえに月神の使いである”月華”を憎む「彼」。
そんな「彼」を愛する”月華”。

「彼」の為に生きることを決意し世界の枠を超えた”月華”。

「陛下・・・ありがとうございます・・・」愛しています”「

「彼」は理解できなかった。”月華”が残した言葉の意味を。

なぜなら”月華”は最後まで自分の気持ちを隠したのだ。

”愛しています”

日本語で伝えられた”月華”の言葉を「彼」はいつか理解するのだ
ろうか・・・。

登場人物（前書き）

簡単に登場人物をメモっておきます。

登場人物はお話を進めるにつれ、追加していきます

登場人物

リン（神崎 鈴）：18歳の美人さん。陛下が大好きでラーシャなひと。

アルキシン・ホスタ：24歳の美形王様。ラーシャが大嫌いなひと。

ゴルノア・コハン：66歳な白ひげ宰相。

マリア&ダノ：40代コンビの母性愛あふれるラーシャの侍女。

ファエル：35歳。幹部的な地位の神官。

マーシャル・ヘルガー：アルキシンの第一文官（35歳設定）

ジョヘル・マルシー：アルキシンの第二文官（30歳設定）

モル・ジャヘルダ：ゴルノアの第一文官&武官（28歳設定）

プロローグ

「いいか。お前はあと10年もすれば神崎の為に西園寺に嫁ぐ事になる。今から覚えておけ。

お前は神崎の為だけに生きる。自分の意思を持つな。西園寺の長男である男以外との接触も禁止だ。余計な感情をもたれては困るからな。」

神崎コーポレーションの現会長である男が実の娘を見ているとは思えない程の冷たい瞳で、まだ8歳の少女に語りかける。

それがその少女が初めて父親の顔を見た日、そして初めて聞く父親からの言葉であった。

あれから10年の月日が経ち、神崎鈴は名門女子校を今年の春卒業する。

卒業後は彼女の父親の言葉通り、”西園寺 紡”という10歳年上の男の妻になる。

いよいよ明日に卒業式を控えた日、彼女は家の自室から庭師が手入れをしている優美な庭に照り注ぐ真つ赤な光を見つめていた。静かな部屋の中、彼女の口から紡ぎだされた言葉が響き渡る。

「ごめんなさい……。私はお父様の駒にはなれない。」

苦しさ、諦め、決意。

様々な感情が入り乱れる彼女の瞳は、ひと雫の涙と共に静かに閉じられたのであった。

月が静かな闇夜に光をもたらす頃。

鈴はベッドから立ち上がり窓に近づき、月を見上げた。

「着替える時間はある？」

誰の姿もない部屋の中で、月に向かい言葉をかける鈴。

すると、霧がかかった声が静かに鈴に答えを返した。

『早くなさい』

厳しさを含みながらも、どこか温かい女性の声。

「わかったわ。」

それから暫くしてシンプルな白いワンピースに着替えた彼女は、月の光が差し込む窓辺に立ち静かに月を見上げる。

「ルシア・・・行きましょう。」

迷いなく告げる彼女にルシアと呼ばれた女性、月の神はどこからともなく彼女の側に現れた。

長い金の美しい髪を一つにくくり、黒い服で身を包む姿は静かな闇夜に映える月の神らしい容貌であった。

『あんな男でも父親だ。手紙ぐらい書き残さなくて良いのか？』

そんなルシアの言葉に鈴は微笑を浮かべ微かに首を横に振る。

「私がいなくなった事に気づいても神崎の為・・・いいえ、お父様にとって利益とならなかった

私をここまで生かした事を後悔するだけだと思うから・・・」

家族というものを感じる事がなかった今迄の時間に寂しさと悲しみを覚えながらも、鈴は迷う事なくルシアの言葉を否定するのであった。

ルシアはそんな鈴にそつと手を伸ばし、鈴の手を握る。

『例え・・・向こうの世界に行ったとしてもお前の愛する男はお前という存在を憎んでいる。良いのか？』

鈴は握られた手を強く握り返し、美しく、そして一点の曇りも無い微笑みを示した。

「ええ、あの方の側で生きる事が出来るのであれば私はそれだけで幸せよ。それに、私はあの方の力になれるのでしょうか？」

『向こうの世界に行けばお前は私の力が使えるようになる。それが”月華”だ。』

そのルシアの言葉に鈴は笑みを深くした。

「言ったわよね。私の”月華”としての使命は、キース・いえ、アルキシン陛下を守りアルキシン陛下の為に生きる事だつて。」

『・・・そうだ。地球ではお前は父親の為に生きる事を強制された。そして向こうの世界でもお前は自分の為には生きられない。』

これまで全く表情が変化しなかったルシアが初めて悲しげに瞳を細めた。

「ルシア・・・違うわ。私はあの方に出会って初めて自分の人生に意味を見いだせたの。」

初めて”幸せ”という気持ち、そして誰かを”愛しい”と思う気持ちを知ったわ。

だからね、彼の為に生きる事は私が自分の為に生きる事と一緒に心の笑みを浮かべ言葉を繋ぐ鈴に覚えた悲しみをルシアは自分の胸の中に隠した。

『私はお前が幸せに暮らせる事を祈っているよ』

「・・・ありがとう」

ルシアの言葉の意味を鈴はよく理解していた。

ルシアが自分の為に悲しんでいてくれることも・・・それでも鈴にとって、さっきの言葉は本心だった・・・。

プロローグ（後書き）

初投稿です。これから頑張ります！

プロローグ2

ルシアと鈴が出会ったのは鈴が10歳の頃だった。

周りの環境や人間に合わせて自分を作り続ける毎日を送っていた。心から笑う事もなく、心から何かを欲する事もなく、使用人にさえも甘える事もなく、日本社会において絶対的な権力を誇る神崎の一人娘であるという立場を幼い頃から理解していた鈴にとってそれは当たり前な行動であった。

そんなある日の夜。それは月が美しく光る夜だった。鈴は夢の中でルシアに出会ったのだ。そしてルシアは語った。鈴は18歳の歳に地球ではない別の世界へ行かなければ行けない事を。最初は信じなかった鈴も毎夜、夢の中でルシアと出会う事で段々に信じるようになり、半年も経った頃には鈴は夢の中でルシアと話す事を楽しんでいた。

そんな頃、ルシアは初めて鈴に将来鈴が住む世界を見せた。それから毎夜、鈴はルシアの意識を通し地球ではない”バジーズ大陸”という世界を見続け、バジーズ大陸に存在する各国の歴史や文化、そして言語を学んだ。そして、その中でもバジーズ大陸1の権力を誇るホスタ国で鈴はキースと呼ばれていた少年を見つけたのだ。優しい両親に囲まれて育つキース。将来はホスタ国の王になる事が義務付けられている日々の中でもキースは幸せに暮らしていた。自分と似たような境遇の中で、つらい事を経験しながらも幸せを感じ生きている・・・そんな彼の強い心や人柄に鈴はいつしか魅了されるようになる。それは鈴にとっての”初恋”であった。実際に会った事も、そして話した事もない人、しかも自分の存在は知られていなく、自分が知っているだけの相手を好きに思う自分が最初の頃は鈴自身も信じられなかった。

そんな淡い想いを抱きつつ、いつしか3年という月日が経ち、鈴は13歳になった。起きている間は相変わらずの日々だったが、寝ている間、夢でルシアの意識を通してみるキースだけが鈴の生きている糧だった。そんな中、キースにある悲劇が起こり、鈴は自分がキースに抱いていた淡い想いがすでに”愛”になっていたのだと自覚することになる。

”月華”という存在が不在だったゆえに起きた悲劇……。キースは涙を流す事もなく、愛する父と母の変わり果てた亡がらを腕に抱き、憎しみを悲しみに満ちた心に宿した。”月華”という存在に対しての憎しみを。

鈴も憎んだ。なぜ人々から敬われ愛される存在である”月華”はキースの元に現れなかったのかと。

そして・・そんな憎しみの想いを抱いた時、ルシアが感情を押し殺したような声で鈴に告げた。

鈴が”月華”なのであると・・・。

第1話（前書き）

日本語では月華^{げっか}ですが、ホスタ国ではラーシャです。

第1話

「陛下・・・ただ今神殿より急ぎの使者が参りました。」

24歳という若さにしてホスタ国の王であるアルキシン・ホスタを幼い頃から知っている宰相のゴルノアは複雑な表情で執務中の王、アルキシンの声を掛けた。

「何だ」

書類から視線をそらすことなく、ゴルノアに返事を返すアルキシンであったが、ゴルノアから醸し出される雰囲気に変化を感じ、青い瞳を書類からゴルノアに向けた。

ゴルノアは苦虫を噛み潰したかのような表情を浮かべ白い立派な口ひげを手でなでていたが、アルキシンの視線を受け、意を決したかのように口を開く。

「陛下・・・神殿にお向かい下さい。ラーシャ（月華）様が突如神殿に降臨なさったとの事です。」

“常に冷静、常に無表情”と、ある意味評判のアルキシンであったがゴルノアから放たれた”ラーシャ（月華）”という言葉にその青く澄んだ瞳を瞬時に曇らせた。

手に握られていた書類を荒々しく床に投げ捨てると、憎しみに満ちた瞳をゴルノアからはずし、無言で執務室をあとにした。

一人執務室に残されたゴルノアはアルキシンの怒気に満ちた背を見つめ悲しげに表情を曇らせるのであった。

「陛下っ！お喜び下さい！我らがホスタ国にラーシャ様が降臨なさいました！！」

アルキシンが荒々しく華美な装飾がなされている神殿の重いドアを開くと、既に数人の神官が喜びを全身で現しながら、その場に膝

をつき頭を垂れていた。

戸が開かれた音によりアルキシンが来た事に気づいた一人の神官が、満面の笑みと共にアルキシンに言葉を掛けたが、アルキシンのその鋭い視線は、神殿の中央で無表情にアルキシンを見つめているリンに向けられていた。

神官達はアルキシンの態度に驚き、微かに怯えながらも忠実にアルキシンに道を開ける。

アルキシンはそんな神官達に目を向ける事もなく、睨むかのようにリンを見つめていた。

??? ようやく貴方に会えた……。例え憎しみを宿した瞳であっても貴方の瞳に私が写っている……。

鈴は暫くの間無言でアルキシンを見つめていたが、すぐに我にかえるとアルキシンの心を少しでも軽くする為に口を開いた。

「貴方の事は存じ上げております。アルキシン陛下。私は貴方達が拝める存在である月の神ルシアの命で、この国を守る為に異世界から参りました。ラーシャ（月華）という存在は貴方にそんな憎々しげに見られる存在ではないとルシアから聞いています。もう少しご自分の立場をご理解されてはいかがでしょう。」

丁寧な言葉使いではあるが吐き捨てるかのように、そして見下すかのような表情で淡々と言葉を放つリン（鈴）にアルキシンは歪んだ笑みを見せた。

「ほう。貴方は俺に敬ってほしいと？」

リンまであと一歩のところまで立ち止まり、リンを憎んでいるとい

う感情を隠す事なくアルキシンは神殿に入って初めて口を開いた。

そんなアルキシンの言葉にリンは微笑む。

「そんな事は期待しておりません。私が望むのはこの国の平和です。その望みを実現する為には貴方や貴方が信頼されている方々と協力する事が必要です。表面上だけでも大人な対応を取っていただきたいのです」

アルキシンはリンの発言を馬鹿にするかのように嘲笑った。

「俺はラーシャなどの助けは必要ない。即刻自国へ戻られよ」

リンは一瞬言葉に詰まったが、それを振り払うかのように力強くアルキシンの見上げた。

「それは出来ません。最初に申し上げましたが私がこの世界、いえ・この国に参りましたのはルシアの命ゆえ……。私には使命があります。その使命を果たすまでは私はどこにも行きません。貴方はどうやらラーシャ（月華）という存在がお気に召さないようですが、私はこの城に滞在させていただきます。」

気丈にアルキシンを見つめるリンにアルキシンは暫くの間無機質な視線を向け続けたが、静かにリンから視線をそらすとそのまま神殿を出て行った。

残されたリンは先ほどのゴルノアと同じように一瞬悲しげな表情を見せたが、微かにため息をついたあと、二人の様子を緊張の面持ちでうかがっていた神官達に声をかけた。

「すみませんが、どなたか私を”月華”……いえ、こちらの言葉では”ラーシャ”ですね……。ラーシャの為の部屋を教えてくださいますか？ラーシャが現れた時に使用する為の部屋はこの国にも用意されていると聞きました。」

神官達はアルキシンに見せていた顔とは違い優しげで謙虚な女性に変貌したリンに驚いたが、それを隠すかのようにすぐに了解の意を示し護衛官を呼ぶとリンを囲うようにルシー・ラーシャと呼ばれ

る”月の花びら”という名の部屋へとリンを導いたのであった。

????我が俤を許して下さい・・キース。

そつと視線を下げたリンは心の中でアルキシンに語りかける。

アルキシンが憎む存在のラーシャ

憎しみしか生まない存在のラーシャであるリンだからこそ生まれ
た一つの欲

それはアルキシンの憎しみは自分だけのモノにするという歪んだ
願いであった

第1話（後書き）

もう日本じゃないので鈴^{りん}ではなくカタカナ表記でリンにします。

第2話

リンが神官や護衛官に囲まれ廊下を歩いている姿を城に侍従する侍女らが物珍しそうに眺めていた。まだラーシャが現れたという情報は極秘扱いとなつてゐる為、彼女達はまるで一国の王のように守られてゐるリンに好奇心を覚えていた。そんな様子をリンは視界の端に捕えながら、日本にいる父親のことを思い浮かべる。

???? お父様はきつとまだお気づきではないわね……。あとどのくらいで私がいなくなつたことを知るかしら……。

リンが地球と時の流れる早さに違いはないこのバジーズ大陸に来てから、まだ1時間も経つていない。リンはあと数時間後に自分を警護や監視をしていた世話人が自分の不在に気づき父親に連絡することを想像した。

後悔などは全くしてないリンであつたが、父親がこの先自分がいなくなつた事で被る不利益に対し狡猾に対処する事が容易に想像でき苦笑を漏らした。

???? さようなら……。私の唯一の家族であつたお父様。

リンの母親は体が弱い女性であつたため、出産は彼女の体に大きな負担をかけ、リンを産みそのまま意識を戻す事なくこの世を去つた。母親という存在を知らないリンにとって父親は全てであつたが、物思いがつく頃には自分の中で一種の線引きが出来ていた。これも一つの家族の形なのだと。それゆえに愛情をくれなかつた父親を恨む気持ちはない。だが、リンはこれから先、父親を思い出す時に”悲しみ”という感情が薄れて行くことはないだろうと思つたのであつた。

時間にしては数分後、一つの部屋の前で先頭を歩いていた神官が立ち止まった。

「ラーシャ様、我らが国のルシー・ラーシャの間でございます。」
仰々しく腰をおり頭をたれリンに話しかける。それをきっかけにリンを囲んでいた数人の護衛官や神官らも同様に礼を示した。

リンはその育ちがゆえに、自分よりも何歳も年上の人間にこのような態度で接しられることには慣れていた。だが彼らからは純粋にラーシャという存在を尊敬しているという想いが感じられ、予想はしていたが内心リンは戸惑いを隠せないでいた。

神崎の一人娘として、幼少期より何人も人間が己の保身や利益の為リンに接触してきたが、どんなに優しくされようともリンはいつも恐怖を覚えていた。リンの前ではどんなに優しく丁寧な言葉使いや態度であろうとも、裏ではリンを利用する事しか考えていない事を知っていたからだ。実際にそういった会話を聞いてしまった事も多々あるリンにとって、自分に諂うような態度を取る大人は負の存在でしかなかったのだ。その為、このように純粋な気持ちで礼を尽くしてくれる彼らの方がリンには不慣れな存在であった。

リンは深く息を吸うと戸惑う自分の心を律し、礼を尽くしてくれる彼らに心からの感謝をのべる。

「ありがとうございます。もう大丈夫ですので皆様お仕事にお戻り下さい。きつとすでに陛下が侍女を手配してくださっていることでしょうし、私はもう平気です。ありがとうございます。」

微笑みを浮かべながら、静かに頭を下げたリンに神官らは凌駕された。そしてすぐに慌てたように言葉を連ねる。

「私どもはラーシャ様が頭をお下げになる存在ではございません。」
そんな神官の言葉にリンは困ったように笑いながら今度は謝罪した。

「ごめんなさい。こちらの文化などについては勉強して来たのですが、ちよつとまだ慣れないみたいです。これからは気をつけますね。」

階級制度があるバジーズ大陸において、身分の差というもの当然のものであり、ラーシャであるリンはこの世界では一国の王と同様の権力を持つ。そのため、例えどんなに親切にされようと自分よりも身分が下のものに頭を下げることは逆に無礼にあたる場合もあるのだ。この場合はそこまで神経質になることはないが、これが外交の場であつた場合、時には問題視されることもある。

リンはこれからは気をつけようと考えながら、ルシー・ラーシャの間へと足を踏み入れた。

第2話（後書き）

なんか未だにプロローグ的な雰囲気漂っているような……

第3話

護衛官を残しルシー・ラーシャの間へと入ったリンと神官3人。

「それでは暫くの間お待ち下さい。すぐに有能な侍女を何人か選びこちらへよこします。」

これから自分が暮らす部屋を興味深く見ていたリンに神官の一人が声をかけた。ルシー・ラーシャの間は白を基本色に薄い若草色のソファーなどが配置され、とても清潔感の漂うインテリアである。リンはあまり華美な装飾がなされていないことに安堵を覚えていたが、神官から声をかけられた事で意識を神官らに戻し口を開いた。

「いえ、その必要はないと思います。すでに陛下がこちらに侍女の方を手配してくださっているはずですから。」

にこりと微笑みながら言うリンに神官たちは疑問を浮かべた。

「陛下からそのようなお話はお聞きしていなかったと思いますが・

」

戸惑うような表情を見せながら言う一人の神官。他の神官らもあの最悪の初対面を思い出しながらリンを不安気に窺っていた。そんな神官らにリンは笑みを深くしながら、さも当然のように言葉を連ねた。

「確かに陛下はそんな事は仰っていませんでしたが、あの方はどんなに自分自身を犠牲にしても王としての義務を全うされる方だと思います。強引でしたが一応は私がこちらに滞在する事を許して下さいましたようですし。」

神官達はアルキシン陛下を信頼しているような事を言うリンに驚きが隠せなかった。神官達の中で一番地位の高いファエルも驚いてはいたが、彼は先ほどリンが言った言葉を思い出しリンに問いかける。

「先ほどラーシャ様はこちらの世界の事を学ばれたとおっしゃいましたが、アルキシン陛下のことも何かお学びに？」

「・・・そうですね。ルシアの意識を通しこちらの世界を見ていたもので、その際に陛下のことも拝見することがありました。あの方がどういった政治をされているのか知る必要があると思いましたので・・・。」

嘘はついていないが、決して全てを語らない。そんなリンの言葉にファエルや他の神官も納得したように笑みを浮かべ頷いている。

そんな会話を続けていた時、閉じられた扉の外から護衛官の声がノックと共に響いた。

「侍女が参りました。」

リンが言った通り、すでに侍女が手配されていたことに神官らは少々驚きながらも、自分たちの国の王を認めているリンに心から喜びを感じていた。

「????陛下はラーシャ様に対し何か思うことがあるようだが、ラーシャ様には何も無いようだ。これならば時がきつと解決してくれるだろう。」

ファエルはアルキシンとリンの初対面の様子にこれからの未来に不安を覚えていたが、リンの言葉の節々からアルキシンに対しての信頼がうかがうことができ内心安堵していた。

「では、ラーシャ様。私達はこれで失礼致します。」

丁寧に頭を下げ部屋を後にする神官たちにリンは感謝の言葉を述べながらアルキシンが手配した侍女2名を笑顔で迎え入れる。

アルキシンが手配した侍女は城に侍従している侍女の中でもベテ

ランであり、以前は宰相であるゴルノアの侍女をしていた経験も持つとても有能な侍女であった。静かに頭を下げ部屋に入って来た2人の侍女はどちらも40代半ばぐらいであり、とても丁寧な物腰でリンに挨拶を述べた。

「この度、ラーシャ様にお仕えする事になりました、マリアと申します。」

言い終わると共にゆっくりと頭を上げたマリアは部屋に入ってきて初めてリンを正面から見た。

この国の礼儀として身分が下のものは自分の名を名乗り挨拶をするまで、身分が上の者の首辺りまでしか視線をあげてはいけないのである。もう一人の侍女も同様にダノと名を名乗り初めて視線をリンの顔へと向けた。そしてマリアとダノは、リンを見た瞬間同じ感想を胸の中に抱いていた。

真直ぐにのびた美しい長い髪と長いまつげに囲まれた黒い瞳が、膝丈までの白いワンピースによくはえ、儚さが漂うリンをより美しく見せていた。幼少期には可愛いという形容詞が似合っていたリンは成長するにつれ美しいという形容詞のほうに合う容貌になっていた。

その容貌はこの世界においても美しいと称される容貌であり、マリアとダノはこれから仕える主人が性格はどうでも外見が美しい人である事を喜んでいた。

「私はリン・カンザキです。リンって呼んで下さい。これからよろしく願います。あつ、そうだ。私がかこちらの国の礼儀に反するような事したら遠慮なく注意してくださいね？先ほども礼儀に反する事をしてしまって・・・神官の方を困らせてしまいましたの。

「
明るくにこやかに笑い、マリアとダノにフランクに声をかけるリ
ン。」

マリアとダノはアルキシンの態度から、ようやく降臨したラーシ
ヤはとても性格が悪いのかも知れないと思っていた自分たちの意識
をすぐに改めたのであった。

「そんな・・・こちらこそよろしくお願いします。」

そんなマリアの言葉にダノも同意するように頷く。

この部屋に入って初めて笑みを見せてくれた二人にリンは安心し
つつ、自分対しいかなる時も忠義を誓ってくれそうか思案してい
た。

第3話（後書き）

ちよつと整理。

リン（神崎 鈴）：18歳の美人さん。陛下が大好きでラーシャなひと。

アルキシン・ホスタ：24歳の美形王様。ラーシャが大嫌いなひと。

ゴルノア・コハン：66歳な白ひげ宰相。

マリア& amp・ダノ：40代コンビの母性愛あふれるラーシャの侍女。

ファエル：35歳。幹部的な地位の神官。

第4話

「さっそくですが、私の侍女になってくださったお二人にはお話ししておきたい事があります。」

リンはそう前置きをするとソファアーに座り、二人にも向かい側へ座る事を促す。

マリアとダノはそんなリンの言葉に緊張を覚えつつ、ソファアーに座ったリンの向かい側へと歩み寄ったが、立ったまま座る気配を見せない二人にリンは首を傾げ二人を見やる。

「申し訳ございません。使用人である私共がラーシャ様のお部屋にて腰をおろすことはできません。」

リンの視線の意図をすぐに理解しダノが断りを入れる。そんなダノの言葉にリンは困ったように笑った。

「そうだったわね・・・でもきつと話すと長くなってしまっし、陛下の為、いえ、この国の為にも大切なお話なの。礼儀に反する事をお願いして申し訳ないのだけれど、今回だけは私の我が儘を許して座ってくれると嬉しい。」

そこまで言われてしまえば、逆に座らない方が礼儀に反する気が出てきたマリアとダノは二人で目を見合わし、苦笑しながらゆっくりとソファアーに腰を下ろした。

そんな二人にリンは嬉しそうに笑う。

「ありがとう・・・話す前に一つ確かめたいことがあるの。これから私がどういった態度を取ろうとも陛下のため、そして国の為にする事だと信じ、私に忠義を尽くしてくれる？」

いきなりそんな事をいうリンに二人は不安な表情を見せた。

「まだ会って間もないのに自分に忠義を尽くせなんて言うのは倫理に反しているわよね……。まだラーシャとして何も実績がない私に忠義を尽くせと強いるなんて傲慢だと思われても仕方はないと思う。でも、アルキシン陛下が貴方達を私の侍女としてくれたという事は、きつと貴方達はアルキシン陛下からの信頼も厚い・アルキシン陛下が信頼をしている方なら私は何の疑いもなく信頼できる。そんな二人だからこそお願いしたいの。陛下から憎まれている私に何があっても忠義を尽くしてほしいと。」

まるで懇願するかのように二人を真剣な顔で見つめるリン。

マリアとダノは暫く無言でリンの言葉の意味を考えていたが、まだダノがリンと同様に真剣な顔でリンに言葉を投げかけた。

「……ラーシャ様は何故陛下に憎まれていると？」

悲しげに瞳を細め視線を下げたリンは、震えるように答えを口にした。

「……それは知っているからです。陛下の身に起きた悲劇の真相を。」

マリアとダノは、びっくりと肩をゆらし信じられないものでも見るかのようにリンを見た。

「まさか……なぜそれをつ?!」

思わず漏れたマリアの疑問。前王と王妃の死に関する悲劇はこの王城で勤務する者の中で知らない人間はもちろんのこと、国民であれば誰もが知っている事だった。だが、真の理由を知るものは宰相や大臣らなど、この国の重役だけであり、何故そのような悲劇が起こったのかという事はこの国の重要な秘密なのである。

「それをお話するには、まずお二人から忠義を誓っていただかないとお話できません。お二人ともご存知の通り、真相を知る者がそれを語る事は禁じられています。それを私は破り貴方達に真相を語ろうとしている。私の使命と・・貴方達にしか告げる事のない私の想いを分かってもらうために・・。ですから私に忠義を尽くして下さい」という信頼の元にお話したいのです」

マリアとダノは顔を見合わせ、お互いの意思を確認するかにように頷き合った。

「ラーシャ様の侍女としてこの部屋に参った時から私達はラーシャ様に忠義を尽くす覚悟でした。それはお会いしてから変わりません。そして、私達はラーシャ様からの信頼を裏切る事は致しません。」

「・・・ありがとうございます。」

安堵の表情を浮かべながらマリアとダノに微笑みかけるリン。

一度瞳を閉じゆっくりと息をはいたリンは決意したかのように顔をあげマリアとダノを見た。

「これからお話す事は全て何があるとも口外しないでください。神官、護衛官、貴方達の家族・・そして陛下にさえも。」

そう前置きし、マリアとダノが頷くのを確認してからリンはゆっくりと語り始めた。いつ自分とルシアが出会い、どのようにこの世界のことを学んだのか、どのようにアルキシンに起きた悲劇の真相を知ったのか、そして・・その悲劇が起きた理由は何であるのか。

「私はその時まだ自分がラーシャであると知りませんでした。なぜラーシャが現れなかったのか、なぜアルキシン陛下がこんな苦しみを

をおわななければならなかったのか、何も知らなかった私は陛下と同じようにラーシャという存在を憎みました。その時ルシアから教わりました。自分がラーシャであると……。」

そこで一旦言葉を区切ったリンは、その時のことを思い出しつらそうに顔をゆがめた。だがそれは一瞬のことで、すぐにまた無表情になると淡々と説明を続ける。

「……だから理解できるのです。陛下が私を憎む事。私がこのようにこの世界に現れた事で陛下がどれほど苦しんでいるか……。だって私は陛下の幸せをこわし、愛するご両親を奪った敵ですもの。」

そう言葉を続けたリンにマリアとダノも、表情をゆがめ悲しそうにリンを見た。まるで何かを隠すかのように無表情を貫いているリンを見てマリアは、ふと思いたる事があった。

「間違っていたら申し訳ございません……。ラーシャ様はもしかやアルキシン陛下をお慕いしていらっしゃるのですか？」

リンは目を見張り驚きを露にマリアを見る。ダノも同じように、マリアの言葉に驚いたようだった。

第5話

「先ほども陛下が信頼している人であれば何の疑いもなく信じて仰いました。そしてあの悲劇の時、ラーシャという存在を憎んだのですよね？それは陛下に特別な想いがあるからでは？」

リンは微かに笑うとマリアの言葉に肯定の意を示した。

「・・・そうです。これもお二人にはお話するつもりでしたが、私は陛下を愛しています。陛下だけが私が生きる意味でした・・・。ですが決して告げるつもりもない想いです。この想いはこの先消えることはないでしょう。ですが叶う想いでもないのです。お二人も心の内だけに収めておいてください。決して私が陛下を愛していると誰かに悟られるような事はしないでください。」

「・・・そんな・・・ではラーシャ様はこれから陛下がご成婚をなされても黙って祝福するという事ですか？ラーシャ様の地位であれば陛下とご成婚される事は可能です！」
痛ましそうにラーシャにつめよるダノ。

「私は・・・自分の使命を果たしたらこの城を出て行きます。いつまでも陛下のおそばにいれば陛下はきつとずっと苦しい想いをなされるでしょうから・・・」

はっと息をのむダノ。マリアは眉をしかめリンに問いかけた。
「使命とは何なのかお聞きしても？」

「表向きは、この国を平和にすることです。」

「表向き・・・では本当の使命ではないということでしょうか？」

ダノとマリアは戸惑う仕草をみせた。

「いえ・・・結果的にはそういう事になるのです。ですからそれも嘘ではありません。詳しく言うとな私がルシアから告げられた使命は陛下の命をお守りする事で、この国を平和にすることではないのですが、陛下がご無事であればこの国も安泰です。ですから表向きの使命も嘘ではないのです。」

マリアとダノが困惑と緊張を露にし、リンを見た。

「・・・はつきり言えばこの先3回ほど陛下は命の危険にさらされる事になります。ちなみにこの事も陛下への想い同様誰にも告げるつもりはありません。」

「なんとっ・・・、では陛下のためにこの国に？」

「いいえ、私がそう願ったからです。黙って陛下が危ない目に合うのを見ていることなんて出来ませんから・・・。愛する人が危険な目に合うと知っていたら、何としてもそれを回避しようとするのは恋する乙女なら当たり前のことでしょう？」

笑いながら首をかしげるリン。マリアとダノはリンの想いの深さと覚悟を感じ、息をのむ思いだった。

「・・・わかりました。秘密をお守り致します。決してラーシヤ様の本当のお気持ち悟れることがないよう、そして使命の詳しい内容が露見する事が無いようこの事は私達の胸の奥底にしまい込んでおきます。」

マリアとダノは本当の意味でラーシャの力になると、この時決意するのであった。

第6話

翌朝、リンは窓から差し込む日差しを感じ目を覚ました。

昨日の夜、リンはマリアとダノに大まかな話を話終えてすぐ眠りについたのである。

???? 私の新しい人生の2日目が始まるのね……。

まぶしいぐらいの日差しにリンは目を細めながら暫くの間感傷に浸っていたが、ノックの音が聞こえ我に返る。

「おはようございます。マリアでございます。」

リンは慌ててベッドから起き上がると、寝る前に渡されたこの国独特の薄い布で作られているロングスカートのようなパジャマの裾を直し、髪の毛も手櫛で整えた。

「ラーシャ様？」

マリアは返事をしないリンにもう一度ドアの向こうから声をかけた。

「ごめんなさい、入って。」

慌てたようなリンの声で、マリアはリンが起きたばかりであると推測し苦笑する。静かに開けられたドアから現れたマリアが苦笑を浮かべているのに気づくと、リンは照れくさそうに下を向いた。

「寝坊しちゃったわ。」

そんなリンの言葉に笑い声をこぼしたマリア。

「寝坊ではございませんわ。まだ朝の7時ですから。ちょうどいい

時間でございます。」

それから顔を洗い服を着替えると、リンは自室にてマリアに用意してもらった朝食を一人静かに食すのであった。その間、マリアはずっと部屋の隅に立ちリンが食べ終わるのを待っている。

????今日の予定はもう決まっているのかな。

一人もくもくと用意された朝食を食べながら、リンは今日の予定を考えた。もし予定が決まっていなかったのであればアルキシンのもとへ行こうと考えていたのだ。

「ねえ、マリア？今日は何か予定があるの？」

段々と言葉遣いがフランクになってきたリンにマリアは内心嬉しく思いながらリンの問いに応えた。

「いいえ、何も予定はありません。」

「なら陛下にお会いできる？お時間とっていただけるか聞いてみてくださいる？」

マリアは微かに表情を曇らせたが、すぐに了承の意を示した。

「・・・わかりました。ですが良い返事が頂けるかどうかはわかりません。」

リンはその理由について予測が出来ていたので

「ええ。わかっているから大丈夫よ。」とだけ答えるのであった。

朝食を終えたリンは、自分の部屋でダノとおしゃべりをしながら過ごしていた。

まだ部屋の外を自由に歩き回ってよいという許可が出ていないとダノに告げられたため、それ以外の選択肢はなかったのだがリンはそれに対して不満はなかった。むしろ、自分が心から信頼できる相手と楽しく話す一時をリンはとても楽しんでいた。

「そう！じゃあダノの旦那さんはこの国の騎士なのね。どうやって出会ったの？」

声をはずませながらダノを質問攻めにするリンにダノは漸くリンの年相応な姿を見る事ができて嬉しく思った。

「私はゴルノア様の侍女をしていたのですが、その際に・・・」

そんなほのぼのとした時間を過ごしていた時、マリアが微笑みを浮かべながらリンの部屋にあらわれた。

「ラーシャ様。陛下から許可を得る事が出来ました。これからすぐにお会いして下さるそうです。」

そんなマリアの言葉にリンは自分の心臓が大きく高鳴るのを感じた。無意識に頬がゆるみ、嬉しそうな笑みを静かに見せたリンにダノとマリアは少し不安を覚えた。なぜならこんなにわかりやすい態度でアルキシンと接すれば、誰もがみなリンの想いに気づいてしまっただろうと考えたからだ。だが二人は、リンに会った直後、ラーシャに仕えろと命令をくだしたアルキシンの態度を思い出し、アルキシンの前ではリンは違う態度を取るのかもしれないと考え、ひとまず様子を見る事にした。

「・・・ありがとう、マリア。ではすぐに参ります。あつ、服はこのままで大丈夫？」

この国では貴族や王族など、身分が上の女性が普段着として着ている長い丈のシンプルなドレスのようなロングスカートをリンも着ている。薄い桃色のふわりとしたデザインでとてもリンに似合っていたが、リンは礼服のようなものを着なければいけないのか不安に

なつたのだ。

「いいえ、そのままの格好で大丈夫ですわ。」

ダノの言葉に安堵するとリンはマリアとダノ、そして外に控えている護衛官に導かれアルキシンの待つ執務室へと向かうのであった。

第6話（後書き）

ようやくアルキシンとまともに会話できるっぽいフラグたちました

第7話

アルキシンの執務室の前で護衛官や侍女のマリア達がアルキシンの自分が訪れた事を伝えているのをリンは緊張しながら待った。

????昨日と同じ態度・・・かわいげのない傲慢な感じ・・・。
リンは今から自分がとるべき態度を脳内にイメージする。

そんなリンが今日、執務室に来なければいけなかった理由。それはアルキシンの3回命の危険にさらされるという出来事の内、最初の1回目が間もなく起きるからであった。実際いつ事件が起きるかアルシアから聞いているリンは、自分の使命を果たすために、今その一歩を踏み出そうとしているのである。マリアとダノには本当の使命については伝えたが、いつアルキシンの危険な目に合うのかまでは知らないという風に伝えてある。あまり自分の使命のことで他の人に負担をおわせたくない、という想いから嘘をついたのだ。

アルキシンの側近中の側近、宰相のゴルノアがにこやかな笑みを見せながら、自ら執務室の扉をあけリンを迎え入れた。アルキシンの側近であり、アルキシンの忠誠を誓っているゴルノアであったが、視線はリンの首のあたりまでしか上げておらず、ラーシャであるリンに敬意を払っていた。

そしてゴルノアは執務室に置かれている立派なソファアまでリンを案内する。マリアやダノ、そして護衛官は執務室に入る事はその身分によって許されていないので、扉の外でリンを待つのであった。

リンをソファアまで案内し、ようやくゴルノアはリンに挨拶をし

た。

「お初にお目にかかります。ここ、ホスタ国にて宰相をしておりますゴルノア・コハンと申します。以後お見知りおきを。」

ようやくリンの顔を見たゴルノアは、この世界では見る事がない黒目黒髪にまずは視線を奪われた。そして次に、整った美しい造形の顔立ち、そして品のある立ち振る舞いなど、リンの全てに神秘的な美しさを感じ思わずといったように口を開いた。

「これはまた・・想像よりもとても美しい。」

立派な白ひげをなでながら、ゴルノアは感心したようにリンに言う。そんなゴルノアにリンは微笑みだけを返した。

「こちらにお掛け下さい。ラーシャ様。」

ゴルノアはリンがまだ立ったままだったという事に気づき、じつとリンを睨むように見つめているアルキシンの向かいのソファーにリンを勧めた。リンはゴルノアに感謝の意を示しながら、座り心地は抜群ではあるが少し華美すぎるソファーにゆっくりと腰掛けた。

「まず用件を聞く前に覚えていて欲しい事がある。貴方がこの城に滞在する事は、ラーシャという身分から許される事ではある。何をするにも自由だ。だが、一つ言っておく。俺に関わるな。王である俺とラーシャである貴方の身分は同様であり、貴方は俺に従う必要はない。そして貴方も俺を従わせる事は出来ない。」

アルキシンは厳しい声音と共にリンを射抜くような視線で見やっただ。リンは無表情でアルキシンの見つめ返しながらも、アルキシンの言葉の意味を瞬時に理解した。

「????やっぱり私の事など見たくもないのね……。でも、ごめんなさい。私は貴方の願いを叶えてあげられない……。」

どんなに無表情を貫こうとも、愛する人からの憎しみのこもった目、そして拒絶を露にする言葉にリンの胸は苦しみを覚えていた。

静かに息を大きくすったリンは、自分の使命を果たすために必要な一步を踏み出した。

「陛下に命令を下すような真似はもととする気ありませんので、それに関しては了承しております。ですが、陛下に関わるという事に関しては了承しかねます。なぜなら私に政治に関わらせてほしいのです。アルキシン陛下がこの執務室にて王としての仕事をなされている間、私も居させて下さい。」

思いもしなかったリンの言葉にアルキシンはもちろんのこと、アルキシンの後ろで控えていたゴルノアも、その表情に不快感を写した。

「なんだと・・・？俺が許すとも思っているのか？」

「あら、許される必要がありますか？先ほど陛下が自ら仰いましたよね。自分に従う必要はないと・・・。」

リンはその言葉と共にアルキシンに優しく微笑んだ。まるで、優位な立場にいるのは自分であるということを主張するかのように。

????どうやら、このラーシャ様は一筋縄では行かないお方のようですね。さてさて、陛下はどうすることやら。

政治に関わると言ったリンに不快感、そして警戒を抱いたゴルノアであったが、リンが引く気がないことがわかると、諦めのような気持ちも浮かび、これから始まるアルキシンの不穏な日々を思い愉快そうに目を細めるのであった。

第8話

長い沈黙の後、アルキシンは重々しく口をひらいた。

「政治に関わりどうする気だ」

「私の使命を果たすために必要なことなのです。それ以外の気持ちはありません。」

真剣な表情でそう言い切ったリンは一旦言葉を切ると、また人に感情を読ませないかのような無表情に戻った。

「明後日、又エール国から使者が来ますよね？その際に立ち会わせて下さい。」

突如語られたリンの言葉にアルキシンの眉をしかめる。
「・・・なぜ又エールから使者が来ると知っている。」

「私はこの世界のこと、文化や言語、それに経済、そして政治、全てを学んできました。今起こっている事で知らない事はありません。」

そんなリンの言葉に今迄黙っていたゴルノアが問いかけた。

「言語を学んだということは、もともとは違う言葉をお話になれていたのですかな？」

リンはアルキシンの後ろに佇んでいるゴルノアに視線を移すと静かに頷いた。

「そうです。私は”地球”という世界の”日本”という国から来ました。そこでは”日本語”と呼ばれる言語を使用していたため、こちらの世界の共通語、”バズル語”は学ばなければいけなかったのです。」

「それはいつからお学びに？」

まるで産まれた時からバズル語を使用していたかのような完璧な発音、そして文法に感心し出た疑問であったが、その問いに対しリンは初めて言葉をつまらせ視線をそらした。

「それは・・私が10歳の頃でしたので・・もう8年も前のことになります。」

リンは言いにくそうにその事実を述べる。すでに様々な覚悟を決めているリンではあったが、8年も前からこの世界のこと、そしてゴルノアやアルキシンの事を知っていたと伝えるという事はとても言いにくいことであった。

そして、案の定アルキシンは言葉をあらげリンを追いつめた。

「・・・ではお前はあの時・・・すでにラーシャであり、この国に来る事が出来たという事だな？」

リンは一瞬瞳をゆらしたが、すぐに表情を無に戻すとアルキシンを見た。

「あの時とは陛下のご両親が亡くなった時のことでしょうか？その事であれば、あれは防ぎようのなかった悲劇としか言えませんか。あの時はまだ私は13歳でしたので、自分の国を離れなくなかったのです。仕方ないでしょう？ラーシャだってただの人間なのですから。」

アルキシンからしてみれば、悪びれもせず自分が国を離れなくなかったからアルキシンの両親を見殺しにした、と言っているリンにアルキシンは目の前が赤く染まるのを感じた。ゴルノアはすぐにアルキシンの異変に気づき荒々しく言葉を放った。

「陛下！お気をお沈めください！」

すでに腰にさげている王剣に手を伸ばしていたアルキシンをゴル

ノアが止めに入る。そんなアルキシンの様子をリンは驚きもせず見ていた。

アルキシンはゴルノアの声に剣から手は離れたが、立ち上がったまま無言でリンを見下ろしていた。

「私を殺したいですか？」

そんなアルキシンを見上げるように、感情も浮かべずリンは言う。ゴルノアは訝しげにリンを見やるが、リンの表情からは何をリンが考えているのか把握することは出来なかった。

「・・・何と答えてほしい。俺がお前を殺したいと答えれば、お前は黙って死ぬとでも・・・？」

アルキシンは怒りや憎しみを全てリンに叩き付けるかのように荒々しい声音でリンに答えを返す。

リンは静かに瞳を閉じるとアルキシンの視線から逃れるように下を向いた。

「私は使命を果たすためにこの国に来ました。その使命が果たされるまでは、殺されても死にません。たとえ私の命が尽きようと私はその使命だけは果たしてみせます。それまでは・・・私が政治に関わることに、そして陛下に関わることをお許しください。」

立ち上がったまま見下ろすようにリンを見ているアルキシンからも、そのアルキシンの後ろからリンを見下ろしていたゴルノアから

も、この時のリンの表情は見えなかった。

だから誰も気づかなかったのだ。

リンが今にも泣き出しそうな表情をしていたことに・・・。

第9話

執務室から出て来たリンの表情が固かったことから、アルキシンと良い雰囲気の中、会話することが出来なかったのだとマリアとダノは瞬時に悟った。

執務室の外で待っていたマリアとダノ、そして護衛官達に対し「ありがとう」と言ったリンはそのまま自室へと戻る道を歩き始める。

「ラーシャ様、大丈夫ですか？」

無に徹しているリンが心配だったマリアは歩きながらリンに尋ねた。ダノもマリアの隣で同じように心配気な表情を浮かべている。

「大丈夫よ。心配しないで。ただ、これから毎日執務室に行く事になったの。陛下がお仕事をされている間はいるつもりです。」

リンはマリアとダノを安心させるように朗らかに微笑み明日からの予定を告げる。

「・・・では毎日陛下とお会いになるということでしょうか？」

驚きを含んだ声音でマリアがリンに尋ねる。ダノも同じように驚きを露にしていた。

「ええ。詳しいことは部屋に帰ったら話すわ。」

リンの前と後ろを囲むようにして歩いている護衛官に聞かれることをさけるために言ったリンの言葉の意図を忠実な二人の侍女はすぐに理解しその場での会話を終えた。

ラーシャがホスタ国に降臨したということは、一応はまだ極秘扱いである為、神官以外ではリン付きの護衛官と、マリアとダノ、そしてアルキシンやアルキシンの側近達を知るだけである。神に仕え

る神官はリンが神殿に現れた時にいなかった者でもラーシャの降臨をすでに知っている。それは神官であるがゆえ、神に関わる事柄に關しては神官同士がお互いに同じ知識と情報を持つために昔から決められている規定なのだ。

いつまでも神官以外の者全員に極秘扱いにしておくことは国としても出来ない。その為、アルキシンは各国にラーシャ降臨の知らせをすでに送っていた。リンもその事を予想し、明後日訪れる又エル国との謁見を申し出たのだ。すでに知らせを送っていればラーシャである自分の立場を明かすことが可能だと考えたからである。リンの予想通りアルキシンが又エル国の使者との謁見を最終的には認めたことから、すでに各国に知らせを送っているのだとリンは確信を得ることが出来たの。

自室に戻るとリンはすぐにマリアとダノをソファアに勧めた。一瞬抵抗を見せた二人であったが、昨日のこともあり一種の諦めを含んだ表情でソファアに腰掛けるのであった。

「さっきの続きですが、一日中執務室にいるつもりはないの。遅くても夕方には引き上げるわ。あとお昼はここで食べるつもりなのだけれど、手配をお願いしてもいい？」

「もちろんでございます。」

すぐに了承の意を示し頷くダノとマリア。

「ありがとう。それと明後日又エル国から使者が来るのだけれど、私も謁見の場にいることを許されたの。外交の間ではドレスを着るべきだというのは分かっているのだけれど・・・私ドレスなんて持

ってなくて・・・どうしたら良いかしら？」

不安そうに服のことを心配するリンにマリアとダノは一瞬言葉に詰まったが、二人は目を合わせると、くすくすと笑い出した。そんな二人をリンは不思議そうに見やる。

「どうしたの？」

何故二人が笑っているのかわからないリン。

「ラーシャ様、そんな心配をなさる必要はありませんわ。ラーシャ様が普段めされる服も、そういった場合に必要になるドレスなどもこちらでご用意致します。もちろん借りるのではなく買うのですから、全部ラーシャ様のものですわ。」

リンはそんなダノの言葉に微かに表情を暗くした。

「・・・それは民の税で支払われるということよね？」

「それはもちろんです。ラーシャ様はこの世界に幸をもたらす月神の使いですもの。国民・・・いえ、この世界の者全員が敬愛するお方なので、ラーシャ様の為に税が使われることは当たり前のことです。」

さも当然のように言葉を連ねるマリアにリンは複雑な表情を浮かべたが、すぐに強い意志を瞳に宿した。

「・・・ありがとう。その想いを裏切ることがないよう・・・精一杯ラーシャとして生きるわ。でもね、なるべく税は使いたくないの。だからドレスも数着でいいし、普段着もそんなにいらないわ。アルキシン陛下に恥をかかせない程度にあれば十分よ。私には民のお金を使わせてもらう以外に生活する術がないことは分かっているけれど、必要最低限にしたいの。食事も豪華でなくていい、宝石類もいらない・・・もし問題になるようだったら私がそういうのは好きではないという風に言ってくれてかまわないわ。」

マリアとダノは悲しそうにリンを見た。

「そんな事を仰らないでください・・・ラーシャ様は私達にとっても大切なお方です・・・そんなラーシャ様にそこの貴族以下の生活をさせることを出来ません。」

そんなマリアの言葉にダノも強い同意を示すように何度も頷いて
いる。

第10話

リンはそんな二人に苦笑をもらした。

「たとえ私が望む生活が貴族以下であっても、私は決して不幸だとは思えないわ。皆がこの国の為に収めている税金で暮らさせてもらい、毎日安心して寝られる場所もある、そして毎日ご飯もいただける。そんな生活がこの世界においてどんなに幸せなことか私は知っています。他国から陛下が何か言われることがない程度に暮らせればそれでいいの……。」

ラーシャであるリンが何回も同じドレスを着て社交の場に出れば、アルキシンが王としての責任を果たしていないと思われる可能性がある。それをリンは危惧しているのだ。

「……分かりました。なるべく出費を抑えます。ドレスは同じのを着てもその場にいる人が違えば気づかれることもないでしょう。ですが、陛下はお気づきになられると思います。宝石も買わない、ドレスも数着しか買わないとなれば逆に陛下に対し失礼にあたるかもしれません。」

リンはそんなマリアの指摘に、
「そうね……。それは考えてなかったわ。ごめんなさい。」と述べると思ふ素振りを見せた。

マリアとダノはそんなリンの様子を、リンが考えを変えてくれ

ばと祈りながら見つめるのであった。

????どうしたらいいかしら……。宝石に関しては嫌いだと公言すれば問題はないとして・ドレスも数着しか買わないとなれば、陛下のことだから何か思うかもしれない・。

暫くの間、無言で考えていたリンであったが、諦めたかのように小さくため息をつく、心配そうに自分を見つめているマリアとダノに軽く微笑んだ。

「宝石類は好きではないと公言しますからそれは問題ないでしょう。でも、ドレスに関しては・マリアとダノに任せます。必要な場合は用意して下さい。」

「はい！お任せ下さい。」

ほっとしたような表情で笑みを浮かべる侍女二人にリンは「お願いします。」とだけ返すのであった。

その夜、リンはルシアと夢の中で出会った。

リンは自分が寝ているのを感じながらも、意識が覚醒するのを感じた。

「・・・ここは？」

リンは辺りを見渡すが、そこは真つ暗な闇に包まれており、どこを見ても何も無い空間だった。そんな空間の中で浮いているような浮遊感を味わいながら、しばらくするとリンは目を凝らしじっと一点を見つめた。

「ルシアね？」

リンがじつと見つめていた箇所に優しく静かな光が現れた瞬間、そこには静かな光に包まれたルシアがいた。

「やっぱりルシアだったのね。」

嬉しそうな笑みを見せるリンにルシアは美しい金髪をなびかせながらリンのもとへと近づいた。

その表情は相変わらず無表情で感情が読み取りにくいものであったが、どこかリンを案じているような雰囲気を感じていた。

「悔いはないか」

ルシアの口から一言目に発せられた言葉にリンは思わず笑みをこぼす。

「ありがとう。心配してくれて……。でも、本当に悔いはないの。むしろ考えていたよりもずっと幸せなの。私ね……。やっぱりキースが大好きなの。どう思われていてもいい。キースの為に私には出来ることがある……。それだけで私は満たされるの。」

心から幸せそうに微笑むリンにルシアはなおも問いつめた。

「幸せだけではないだろう？ 悲しみも覚えたはずだ。」

「……。そうね。愛する人に憎まれ、死を望まれるのはどんなに我慢しても苦しいわ。でも……。キースは私を憎むことで両親の死を乗り越えた……。憎むことが時には人を生かす力になることもあると思うの……。決して良いことではないけれど、キースには他に選択肢がなかったし、ラーシャが原因で起こった悲劇なのだからラーシャを憎むのは当然のこと。だからね、私は憎まれたままでいい。」

第10話（後書き）

微妙なところで区切ります……

第11話

「だが、憎しみを覚えたままではアルキシンは前には進めない。現に今もお前を憎み、そして苦しんでいる。お前はわざとものとアルキシンに憎まれようとしているようだ、私にはそれが良い案だとは思えない。アルキシンを過去に閉じ込めるようなものだと感じる。」

リンはルシアの真剣な視線をうけとめながら、朗らかに微笑んだ。

「ええ……。いつまでも私を憎んでいては決してキースは幸せにならない。だからね・・ルシア、私は自分の使命を終えた時キースに償おうと思っているの。」

ルシアは微かに目を見開いた。

「どうやって償うつもりだ？」

リンは朗らかに微笑みながらも、視線をルシアから外し静かに言葉を重ねた。

「私の命で償うわ。キースが望むのであればキースの手で・・」

そんなリンの言葉をルシアは微かな怒りを含ませ遮った。

「愚かなことを！たしかにお前はラーシャだが、彼らが死んだときお前は自分が何であるか知らなかったのだ。何故お前に責任がある？どうしてお前が償う必要がある！」

瞳に憤りを宿すルシア。リンは視線を下に向けたまま嘲笑をもらした。

「私も・・・許せないからよ。ラーシャという存在を・・・。あの時から私も憎んでいる・・・キースのご両親を見殺しにしたラーシャを・・・っ・・・!」

闇の中に響き渡る心を引き裂くかのような切ない叫び。

リンが悲しみを露に声を荒げる姿。そんなリンを初めて目の当たりにしたルシアは自分の中から怒りが消えて行くのを感じた。逆にルシアに訪れたのは後悔と悲しみであった。下を向いているリンの瞳から溢れ出る涙。ルシアはそっとリンを抱きしめた。

「・・・お前がそんな風に感情を露に泣く姿を初めてみた。」
声をあげず泣き続けるリン。

「・・・ラーシャはお前なのだ・・・。自分を許せないか?」

そんなルシアの言葉にリンは無言で首をふる。

「私が故意にお前にラーシャであるとは伝えなかったのだ。憎むべきはラーシャである己ではなく私であろう?」

ルシアから告げられた言葉にリンはくぐもった声で答えた。

「それは私がラーシャとして適しているか判断できなかったからでしょう？皮肉にもキースのご両親が亡くなったことで私はキースに対する自分の想いをはっきりと自覚したわ。だからルシアは私にラーシャについて話すことが可能になった・・・だってラーシャの使命はキースを救うことだもの。キースを大切に思わなければ果たせない使命だわ・・・。」

そう言い終わるとリンはそつとルシアから離れた。目を赤くはらしながらも、すでに涙を抑えいつもの自分に戻ろうとしているリンをじっと見つめるルシア。

「お前は知らなくても良いことまで知ってしまう。時には気づかぬ努力をすることだ。」

小さくため息をついたルシアは、諦めたようにリンに優しく語りかける。

「ラーシャとしての使命を教えられた時に気づいたのよ。それまでは何で教えてくれなかったのかってルシアを責めたわ。」

微かに笑いながら言うリンにルシアも小さな笑みを浮かべた。

「ずっと私を責めていれば、お前にもアルキシンと同じように心の逃げ道が出来たものを・・・。」

「あら、それは違うわ。キースがラーシャを憎むのは本当にラーシャに原因があるからよ。でも、ルシアは違うもの。ずっとルシアを責め続けるのはどんなに頑張っても無理よ。」

くすくす、と笑いながら言うリンにルシアは大げさにため息をついた。

「お前は頑固なのだ。もういい、分かった。償いとして死ぬことでお前も幸せなのであれば私は何も言わない。お前の好きにするが良い。だが覚えておきなさい。アルキシンが本当にお前の命を望み、お前が償いとして自分の命を差し出すのであれば、私は私の判断でその状況において適切な対処をする。反論は受け付けない。良いな？」

リンは笑うのをやめ真剣にルシアを見やる。

「キースの幸せを壊さない対処であれば反論はしないわ。」

そんなリンの言葉に、ルシアは静かに頷いた。

「アルキシンの幸せはお前の幸せであろう？ 私はお前の幸せを祈っているのだ。決して悪いようにはせぬ。」

こうしてルシアとの夜はすぎ、意識上ではあるがリンは久しぶり

のルシアとの再会を楽しんだのであった。

第12話

「では、ラーシャ様。お昼のお時間になりましたら、お迎えにあげます。」

そんなダノの言葉に頷きながら、リンはアルキシンの執務室へと足を踏み入れた。

「おはようございます。ゴルノア様。」

昨日同様リンを迎え入れてくれたゴルノアに微笑むリン。

「今日もお美しいですな。」

朗らかに笑いながら言うゴルノアにリンは笑いながら

「ゴルノア様こそ今日も魅力的な白髭ですわ」と返すのであった。

自慢の髭をほめられたゴルノアは機嫌を良くし、にこにこ笑いながら、そんな二人の存在を無視し机に向かい書類を読んでいるアルキシンのもとへリンを導いた。

「アルキシン陛下、おはようございます。」

自分の方を見ずに、視線を下に向けたままにいるアルキシンにリンはかまわず挨拶をした。もちろんアルキシンからの返答はないがリンは満足だった。朝の挨拶が出来たことが嬉しかったのだ。

それから、リンは与えられた机に座りアルキシンと同じ書類を読み進めた。それは昨日、ゴルノアが文官らに、これからはアルキシンの提出する書類は全て写しを一部用意するようにと命じたため

あった。リンはそんなゴルノアに感謝しながらも、真剣に書類を読み進めていく。それらの書類は地方領土の管理問題や、雨が続いたことによる土砂崩れや増水などに関する調査結果など、多岐にわたるものだった。中にはアルキシンに許可を求める書類などもあり、アルキシンの判断によって承認や否認の判子が押されていく。

あつという間に午前がすぎ、お昼の時間になり侍女であるダノがリンを迎えにきた。

「では一度自室に戻ります。失礼致します。」

ゴルノアと文官から頭を下げられたのを確認しリンは執務室から退室した。アルキシンはリンを見ることもなく未だに書類を見ているのであった。

一時間ほど経ち、食事を終えたリンは執務室へと戻った。そこには未だに執務をこなしているアルキシンがいた。ゴルノアも文官らの姿もなく執務室にはアルキシンのみであった。リンはアルキシンと二人だけだという状況に一瞬緊張を覚えたが、そんな動揺を隠しつつ自分の机へと向かった。

????文官もいないということは陛下が下がらせたのね・・・。

陛下はお昼にいくつもりはないのかしら。

王であるアルキシンの未だに執務をこなす中、アルキン付きの文官が食事に下がることはありえない。つまりアルキシンの命じ食事にいかせたということであり、他者を氣遣う氣持ちを忘れないアルキンにリンは氣づかれないように小さく微笑んだ。

????あの時からほとんど笑わなくなってしまったけれど、こ
ういうところは全く変わってないわ・・。

リンは愛しさで胸が締め付けられるような感覚を覚えながらも、
どうやったらアルキシンは休憩をとってくれるのか思案した。

真剣に執務をこなしているアルキシンはリンの存在すらも忘れて
いるようである。リンは集中しているアルキシンの憎まれている自
分が声をかけ、心を乱すことに罪悪感を覚えながらも、そっと席か
ら立ち上がるとアルキシンへと近づいた。

「・・・陛下。そちらの書類は私が読み要約し書類に致します。その
間にどうぞお食事をして下さい。」

リンがアルキシンの前に立ち、声をかけるとアルキシンは漸く今
日初めてリンを見た。その瞳は変わらず冷たいものであったがリン
は構わず言葉を続けた。

「陛下もご存知の通り、一つの書類に対し最低でも10枚程枚数が
あり、重要ではない情報も全て書かれています。陛下にはこういつ
た書類以外にもお仕事がありますよね？私にはありません。で

すから、私が全て読みそれを1枚程の書類にまとめます。決して重要な要点は見逃しません。・・・といっても私の事を信用していただくことは難しいかもしれませんが、一度だけ機会を頂けませんか？今陛下が読まれている・・・”ソエル村に関する病疫の調査結果”は私も先ほど読みました。ですからあとは、重要項目をまとめるだけです。」

リンの説明を黙って聞いていたアルキシンは手に持っていた書類を静かに机に置いた。

「・・・一刻ほどで戻る。それまでに書類ができていなかったら今回の話はなしだ。」

リンはアルキシンが自分の提案にのってくれたことに驚きながらもすぐに返事を返した。

「分かりました。ありがとうございます。」

頭を下げ感謝を示すリンをアルキシンは一瞬訝しげに見たが、リンはそれに気づくことなく自分の机へと戻ると、白い紙を一枚引き出しの中から出し、さっそく書類を作成し始めるのであった。そんなリンの姿を尻目にアルキシンは執務室を後にした。

第13話

アルキシンは会食の場へとおもむき、大きな長い机に一人座りゆつくりと食事をとっているゴルノアの真正面へと腰をおろした。アルキシンの執務室を退室した際に、アルキシンの侍女らがすぐに料理場へ指令を出したことで、アルキシンの席にはすでに食事が用意されていた。アルキシンはゴルノアに視線をやることもなく食事の手をつけたが、ゴルノアの愉快そうな視線を感じ仕方なくゴルノアに声をかけた。

「何が言いたい」

素っ気ないアルキシンにもゴルノアは気にすることなく愉快そうに笑った。

「いやいや、陛下が書類が山ほどある日に食事に来られるとは一体何があったのかと。」

ゴルノアの疑問はアルキシンにも予想できたことであつた。なぜなら、アルキシンは日頃仕事が多い日は誰が何と言おうと食事をすることも、休憩をすることもなく仕事を続けるからである。

今日もその仕事の多い日にあたるのだが食事をとりにきたアルキシんに、ゴルノアはリンと何か関係があるかもしれないと思いつつ愉快気にアルキシんに質問を投げかけるのであつた。

「試す機会を与えただけだ。」

多くを語らず口を閉ざしたアルキシんにゴルノアは

「ほう。そうでしたか。それは楽しみですなあ」とだけ返し、熱い茶をすするのであつた。

「まだ30分ぐらい時間あるわよね……。あと陛下がお読みでない書類はどれかしら」

執務室には数名の文官とリンだけがいた。文官はその身分ゆえにリンに挨拶をすることが許されていないため、直接リンの顔を見ることが叶わない。色々な噂が飛び交うリンに、「いきなり現れたこの女性は一体どういった方なのだろう」と思いながらも、自分達の仕事に精を出していたのだが、リンの言葉に文官達はお互いに目を合わせ、リンの問いに答えるべきかどうか迷っていた。声をかけられていなければ、文官達から王であるアルキシンと同じ階級であるとお達しがあったリンと、言葉を交わすことは認められていないからである。今のリンの言葉は独り言のようにもとれるため、文官達は誰も口を開かなかった。

リンはというと、特に文官に声をかけたわけでもなく、疑問を独り言のように口にしたただけであったのだが、アルキシンの机を見やり、二つの山にわけられた書類を見てどちらがまだ読んでいない書類の山なのか判断がつかずにいた。

アルキシンの机の前で悩んでいるリンの様子を後ろからそつと見ていた文官達はひそひそと声を掛け合い始めた。

「なあ。お声をおかけした方が良いか？」

「いや、お達しがあっただろう？あの方の階級は陛下と同様だと思うようにと。声なんて掛けたら不敬罪だ」

「でも、まだ悩んでおられるぞ？」

「しかし・・・」

3人の文官達はリンから声をかけてくれれば、と思いながら声を交わしていたところ、小さくため息をついたリンがいきなり振り向く素振りを見せたため、3人は慌てて視線を下げリンの顔を見ないようにした。

「あの．．ごめんなさい。どうしてもわからないことがあって．．」
そんなリンの申し訳なさそうな声に文官の一人が即座に返事を述べた。

「陛下と同様の階級であるとお聞きしております。私共にそのような氣遣いをしていただく必要はございません。何でもお申し付け下さい。」

返事をしながらも視線は決して上にむけず敬意を現している文官。リンは自分の階級についてすでにアルキシンが通達していることを考えていなかったため、少し驚いていた。

「?????そうよね．．ラーシャだとは言わなくても、身分については言わなければ私が執務室にいることで何か問題が起こるかもしれないものね．．。何で気づかなかったのかしら。皆さん私の顔を見ないのに．．。」

リンは文官達の身分からして、宰相であるゴルノアとは違い自分達から挨拶をすることが出来ないという規則があることを思いだし、自分から挨拶をした。

第14話

「ありがとうございます。私の名前はリン・カンザキといいます。リンとお呼び下さい。私の詳しい身分などについては・・・きっと明日ぐらいにはお聞きになると思います。」

「リン様・・・ご挨拶頂き有り難うございます。」

1人の文官の言った言葉に重なるように、他の2人の文官達は頭を下げた。リンは挨拶をしたが、文官達の身分からいって、リンの許しがない限り自分達の名を言うことが出来ない。その為、文官達はまだ視線を上げることがなく、リンの顔を見ていない。リンはそんな文官達の様子を見ながら、どうしてまだ顔をあげないのか、と不思議に思っていた。

?????どうしたのかしら・・・。たしか2階級以上は身分の差がある場合は・・・上のものが挨拶をしたら顔を見ることが許されるはずでは？

10歳の頃からこの世界をルシアの意識を通し見ていたリンであったが、主にはホスタ国の民の生活模様、文化や経済、他にはホス

タ国と交流のある国のことについて学ぶことが多く、マナーなどについてはアルキシンの見ていた時にアルキシンの態度を見て学んだだけであり、ルシアから直接マナーについての教えを得たことはなかったのである。なおかつルシアの意識を通してこの世界を見ている間ずっとアルキシンの見ていることが許されたわけではなく、そういうった”勉強”が終ったあと、目覚めるまでのわずかな時間、アルキシンの会えただけであるリンにとって、文官達が未だに頭を上げない理由が全くわからないのであった。

「あの、私の挨拶は以上ですから、どうぞ顔を上げて下さい。」

不安気に言うリンに文官達は態度を崩すことなく、今度は今迄黙っていた文官の一人がおずおずとリンに答えた。

「私達は文官でありますから、リン様のお許しがない限り挨拶をすることができません。もしよろしければ私達に挨拶をすることをお許しただけだと思います。」

その文官の言葉でリンは漸く自分がマナー知らずであったことに気づいた。

????私が挨拶をしても、私が挨拶をすることを許さなければいけないのね・・・。

「ごめんなさい。知りませんでした。どうぞお名前を教えてください。」

「苦笑を漏らしながら文官達に謝るリンに文官達は慌てながらもリンに挨拶を返した。」

「私は陛下の第一文官をさせていただいております、マーシャル・ヘルガーと申します。それと、どうぞ私達に謝罪などなさらないでください。」

最初にリンに言葉を返した文官が挨拶をしたのを皮切りに、他の二人の文官も口を開いた。

「私は陛下の第二文官であります、ジヨヘル・マルシーと申します。」

「私はゴルノア様の第一文官であり、武官でもあるモル・ジャヘルダと申します。」

最後に今迄一言も口を開かなかったモルが挨拶を終えたことで、3人とも視線を上げリンを見た。そして同時に言葉につまったかのように、驚いた表情を浮かべ、リンをまじまじと見つめる。そんな3人の様子をリンが朗らかに笑うと、3人共慌てて真面目な顔を作り、リンの質問に話を戻そうとするのであった。

内心では、リンの黒い瞳と髪、そしてそんな神秘的な色にあった美しい容貌に未だ胸を高鳴らせていたが、そこはエリート文官達、そんな想いは態度に出さずに自分達の仕事に意識を向けるのであった。

第14話（後書き）

今回は短いです；

お気に入り登録してくださった方々ありがとうございます？
総合評価も92ptいただき嬉しいです。
これからもよろしく願いします

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9035v/>

闇夜の月

2011年10月9日14時56分発行